

# 集蔵体としての『万葉集』をめぐって 西澤一光

——方法的に読むための一試論——

——未来は、絶対的危険という形でしか先取りされ得ない。

(ジャック・デリダ『グラマトロジーについて』)

——「邪説」とは、「真理」を語る説なのだ。(柄谷行人「ヒュー

モアとしての唯物論」)

## 1. 「万葉集」はいかに読めるか」の欺瞞

「『万葉集』はいかに読めるか」——このいかにももつともらしい問いの創りだす閉域のなかでわれわれは自縄自縛がんじがらめになってきたのではなかったか。<sup>〔1〕</sup>

この問いは、商業ジャーナリズムとアカデミズムのつくりだす(あいだ)領域で、しばしば本質的な欺瞞性を發揮してきたのだった。それは、適切な「いかに」(方法)が見つかりさえすれば『万葉集』はきつと読めるはずだという暗黙のメッセーヂを隠すと同時に——二重拘束的ダブルバインドに——唆そそしてきたのだった。だが、そんな「いかに」が到来したという噂は聞かない。期待や希望の類はページと時間の進行につれて蕩尽するのが常であったし、やがて諸言説は消費されていった。

畢竟そのような意味での「いかに」などありはしないのだっ

た。

だが、シエーマは滅んでも具体的なテキストの読みは残ってきた。「私はこう読んだ」という命がけの跳躍があれば、その足跡は残って来た。そういう意味での読みは、『万葉』を売る商業ジャーナリズムの不況とは没交渉に——つまり、等価交換経済の外で——細々とであれ、しかし、だからこそしぶとく、生き延びつづけてきた。それは価値創造そのものの運動だからこそわれわれを捉えて離さないのである。われわれが次のことを学んできたのはまさにそこからだった——「方法的に読む」ということは「方法論で読む」ということは別の地平の出来事なのだ。

## 2. 瓦解する理論と後に残る方法

ここで、注意深い読者であれば、私があらゆる意味での「方法」を否定してはいないことを察知してくださるだろう。

私が用心ないし警戒の眼をさしむけているのは、当然、テキストに先立つて——つまり、テキストに何が書いてあろうと、それから何の影響も受けないような具合に——定立ていりゅうされている

「方法」に向けてなのだから。

——しかし、君はさきほど「われわれは『方法的に読む』ということは『方法論で読む』ということとは別の地平の出来事なのだ」と言っていたね。とすれば、君もある種の方法的な所作を措定していることになるわけだ。しかし、それが君の言う前もつて定立された「方法」ではないという保証はあるのだろうか。君が言わんとしていること、それはある種の遂行矛盾ではないのかね。——

これは、まさしくありうる反問である。すでにまっさらな地平に立ち戻って問題を考え直しつつあるわれわれとしては、こうした反問を無視するわけにはいかなないし、むしろ、積極的に自らに差し向けておく必要さえあろう。そして、もし拙論がこの反問に答えつつ歩んでいくとしても、この反問を消失させてしまつてはならないであろう。

にもかかわらず、小稿は、前もつて定立された「方法」ではないような「方法」ということは考え得るのだし、しかも、それは、つねに——既に、われわれの『万葉集』を読む運動を形成して来てさえいるということを主張するだろう。さきほど触れたように「私はこう読んだ」という命がけの跳躍がそれを露わにしていたのであるから。その営みのうちに来るべき「方法」が先取りされてきたのであるから。

ただし、ここで先取的に言われている「方法」、つまり「方法的に読むこと」は、これまでの歴史の中では、具体性と個性の外観の下に自らを隠してきたのであり、自らを「方法」として語らないままにとどまっていた。

この自らを隠して来た「方法」がまさに「方法」自体として現われるには、テキストに何が書いてあるうともそこから何の影響も受けないような具合に堅固かつ教条的ドグマティックの出来上がった方法論が、そのまさにテキストとは関係なく成立するという性格ゆえに自ら瓦解し、われわれの根底で知的地殻変動が起きるまで待たねばならないのである。

たとえば一般言語学の大成者であったロマン・ヤコブソンが同時にその果敢な挑戦によって詩学 *la poétique* の地平を切り開いた時、その理論の殿堂のなかにはもはや詩そのものが飾られる必要がなかった。ヤコブソンの分析は、他のロシア・フォルマリストのようなインパクトを与えていない。ヤコブソンはごく初期からロシア・フォルマリズムの網領的命題を掲げた人だが、にもかかわらずV・シクロフスキー、V・プロップ、M・バフチンらと同じ運動を推進していた人だとどれほど認知されているだろうか。

よく知られているように、ヤコブソンの言語学の原理は二項対立である。ヤコブソンの二元論は構造言語学者のうちでももつとも徹底したものである。音韻論も意味論もその数学的原理の上に構築されている。ヤコブソンの詩学はこの原理が当てはまる部分——音構造——を主たる対象としている。フェルディナン・ド・ソシュールが言語のなかにはそれ自体実定性ポジティブリティのない——つまり、「音」として聴取不可能な——差異の戯れ *le jeu de la différence* しかないと語ったのに対し、ヤコブソンの理論は明らかに形而上学的根拠づけの所作であり、したがって聖アウグスティヌスやポール・ロワイヤルの記号論シグナル——つまり

能記と所記とからなる記号という概念から一步も踏み出すものではない。ソシユールの言語論の方が——デリダ『グラマトロジー』について<sup>6)</sup>における脱構築的読解にもかかわらず——西欧的知の伝統のなかで異質なのである。

ヤコブソンと同じことが哲学者ポール・リクールの『生きた隠喩』理論にもあてはまる。リクールの書に具体例は必要ではなかった。それは、リクールが具体例から出発して理論を構築したのではなく、西欧形而上学から出発して壮大な構築物を築いたからである。リクールはプラトン、アリストテレス以来の叡智の偉大な歴史を再解釈しているだけで書いている。

これらテキストを読むに成り立つ——それゆえ壮麗に瓦解した——理論構築の例と対照しつつ小稿が目をむけつつあるのは、個々としてはそれぞれ小さな、時としてありふれた、実践の積み重ねの光景に他ならない。しかし、それはすでに述べたように「私はこう読んだ」という命がけの跳躍の積み重ねのなかに垣間見られる読みの光景である。

ところが、『万葉集』というテキストに読解可能性を与えて来たのは、そういう試行錯誤の歴史である。

### 3. 『万葉集』テキストの読解不可能性

実際、『万葉集』は、試行錯誤の歴史によって読み得るものとなってきた。もし、その読みの歴史を念頭からはずしたまま『万葉集』はよめる」といったならば空言になろう。

たとえば、『白文萬葉集』上下二巻の編者・佐佐木信綱氏によれば「萬葉集の原形は、漢字のみを以て書かれたもの」であつ

て「天曆に源順等が訓を加へてより以来は、假字を加へることが習はしとなつて」しまったが、「萬葉集の根本的研究は、白文のものによるべき」である。さらに、「白文萬葉集を刊行するは、一には、萬葉集を原形に復さうとし、一には根本的研究を爲さむとするに外ならない」と主張される。

しかしながら、この言葉は、——著者の意図に反して——「白文万葉集」という企図がむしろ後世の再構築物でしかないことを言わんとしているのである。

われわれは時に大した考えもなく『万葉集』を原文で読むという言葉を口にす。しかし、実際の古写本には訓が付されている。それは、『万葉集』が訓なしには読めないものであることを如実に物語っている。なるほど『万葉集』の原形が漢字のみによって書かれていたことは疑いない。にもかかわらずその原態のままに伝来した本が一本も伝わらないのは、漢字だけで書かれた本文が読めないものだからだ。『万葉集』を書いた人々は、その読みがたさのなかでやりくりしていたが、仮名書きを發明してしまつた人々にはもはやそのやりくりは必要なく、したがって上代人のやりくりの暗黙知も分からないものとなつてしまつたのである。

亀井孝氏は、『万葉集がすべて漢字で書かれたその編纂当時に後代これがかながきの形へやわらげられようとはいまだだれも考え得なかつたにちがいない』という。そして、『万葉がなは、その本質においてかなではなく、漢字であるというのが私の意見である』<sup>8)</sup>と言ふ。

つまり、その文字を読み書きしていた人々は、後世『万葉集』

が漢字仮名混じり文に書き下されるようなことになろうとは夢にも思わなかったはずだと言っているのだ。

実際には『万葉集』を熟読玩味していたはずの亀井氏が敢えて「万葉集はよめるか」と問うている。これは敢えて無知の立場を仮構したアイロニーであろう。氏は、『万葉集』の専門家が「万葉集はよめる」という前提に立ってしまっており、もはやそのことを問おうとさえしないことに対して反問しているのだ。「よめる」ことが前提となつて作品論や編纂論がずんずんと進んでいく、そういう風潮へのアイロニーなのである。

実際、最近の注釈書は、概して、まず漢字仮名混じり文を大書して掲げ、漢字原文は小書きで示すようになってきている。

しかし、実際の万葉歌には「難訓」とまでいかなくても、訓の上での解消不可能な揺れ、ぶれ——一種の差延 *la difference* ——のあるケースは少なくない。それを一つの書き下し文で書くことは不可能なはずなのだ。

亀井氏が衝いている問題の所在はまさにそこだ。氏は「よめるか」と問いつつ文字の問題を提起している。編纂当時の人たちは、まさか自分たちの書いたテキストが漢字仮名混じり文で読まれることになろうとは想像もしていなかったでしょうと言っている。つまり、漢字文字列のテキストは、必然的かつ内在的に、複数の訓を許容するように——差延的に——できているのである。だから、一通りに「よめる」とは限らないのだ。

#### 4. 「集蔵体」としての『万葉集』

しかし、問題は、さらにその先にある。

当時の歌の書き方が示すところでは、他者の書いたテキストの中には甚だ難読の文字があったはずである。それほど、『万葉集』の歌は書き手によって書記方法が異なっている。それは『万葉集』の内部だけの問題ではなく、『古事記』、『日本書紀』、『風土記』、統紀宣命などを含めた当時の書記体系が多元的全体であったことと関わる。当時の文字言語の状況では、書き手によって書記方法に相当な差異が生じて当然だったのである。その状況の中で、口誦の随伴なしに原文テキストが「読める」根拠はどのように与えられていたのだろうか。

そういう——「正書法」の存在しない——状況のなかで他者の文字を読む方法はただ一つであろう。それは、他者（複数）の書いた作品をできるだけ数多く集めて相互に比較し、かつ、それぞれの書き方に内在するシステムを探ることだ。彼らはそういう実践に慣れていた、あるいは、日々そういう実践を生きていたのではないか。

そのような面倒を引き受けずに、巻五の旅人や憶良のようにすべてを仮名書きにすればよかつたではないかというのは暴論<sup>⑤</sup>で、今日のわれわれも完全表音化を採用していない。もし漢字という表語文字の情報伝達力や概念構築力をエネルギーなりエントロピーなりに換算できるとすれば、これはとてつもない高さになるのではないか。漢字を棄てるのはいったん獲得した高さを棄てることである。また、漢字は覚えること、書くことに時間を要するが、情報の伝達においては高い効率性をもつ<sup>⑥</sup>。

だが、『万葉集』を書いた人々が大事にしたのはもつと別のことだろう。彼らが重んじたものが効率性ではなく、多様性で

あり、表現性であったことは確かだ。彼らは他者と異なる文字で書くことを好んだばかりではなく、言わんとする内容を過不足なく表現することに心を砕いている。たとえば、「つま」という語を書くために「妻」でもなく「孀」でもなく「嬪」という字をあてる場合、「周囲を憚つて人には言わず逢えずにいる恋妻のこと」をいうためであるという。

こうした多様な書記方法（特有言語）をそのまま包蔵している姿が『万葉集』だと言えば分かりやすい。それが『万葉集』という書物のありようである。だから、「家持が既成未成の撰集家集などを二十巻によせ集めた時、すべては出来る丈原本の体裁を尊重したのではないか」という澤瀉久孝氏の把握は、合理的であり、包括的である。

『万葉集』が「集蔵体」であるということは、読み難いはずの原文テキストがその読み難い書きざまのまままで読めるものとなること、つまり、個別の歌における表現上の差異の戯れがそのまま許容されるということを意味する。

## 5. 歴史の中の『万葉集』

では、いったいいつ頃からかかる『万葉集』の原文が学理的討究の対象とされるようになったのか。

この点、折口信夫が早くに

萬葉編纂の時代と、其為事に與つた人とに就ては、いろいろの説がある。併し、其據り處となつてゐる第一の有力な證據は、唯、萬葉集自身と、古今集の假名・漢字二様の序があるばかりである。（『萬葉集のなり立ち』）

と言っているのは示唆的である。というのも、寛平五年（八九三）の年記を有する『新撰萬葉集』の上巻序における「夫萬葉者、古歌之流也」云々とあるのを除けば、『古今和歌集』の序における言及をもって『万葉集』はようやく歴史の表舞台に登場してきたからである。この歌集が同時代においては広く享受されずにおわり、平城天皇の時代に補修が施され、さらに醍醐天皇の時代に——古今集が編纂された時期に——「歌」の起源として再発見されるに至るまでは長く歴史の陰に埋もれたままになったと論じられてきているのもさほど無理な想定とは思われない。

ところで『古今和歌集』はそもそもその序によって明らかのように『万葉集』を起源とする王朝の正典である。その「仮名序」はつぎのように結ばれる。

人麿なくなりにたれど、歌の事とどまれるかな。たとひ時移り、事去り、樂しび悲しび行き交ふとも、この歌の文字あるをや。青柳の糸絶えず、松の葉の散り失せずして、まさきの葛、長く伝はり、鳥の跡久しくとどまれらば、歌のさまをも知り、事の心を得たらむ人は、大空の月を見るがごとくに、古を仰ぎて今を恋ひざらめかも。

ここに表わされているのは「人麿が従事していたと伝えられていた勅撰集編纂の事業を継承している意識」であり、『古今和歌集』の仰ぐ「古」とは『万葉集』であるということだ。

つまり、『万葉集』とは、王朝文化の再定礎の身振りのなかで、「やまとつた」の起源（古）として要請されたものなのである。十世紀における『万葉集』の発見は、『古今和歌集』の起

源（古）としての発見であり、「歌」の伝統の発明にかかわることがらであった。それは「原文」に向き合うという意味での読みに繋がるものではない。醍醐天皇の治世は『万葉集』に脚光を当てはしたものの、しかし、なお「原文」そのものとの向かい合いというレベルには達していなかったのである。

実際、先の『新撰萬葉集』には「文句錯乱、非詩非賦、字対雑糅、難入難悟」とあった。これは『万葉集』が当時難解なものであった事を示す資料として解されており、『万葉集』がなお「書物」として読み得るものとはなっていないことを示している。

漢文の創作や真仮名の読み書きに通暁していた菅原道真が「文句錯乱」「難入難悟」と言っているのは、純粹漢文に習熟していた平安朝知識人にとって『万葉集』がむしろ難読の書物だったことを示している。とくに音訓交用の書記方法は「文句錯乱」と映ったであろう。

ともかくこの道真以前には、『万葉集』の存在に光が当てられたことはなく、律令制度下の「歴史」——『続日本紀』、『日本後紀』——の内部に書き込まれることもなかった。それは、『続日本後紀』にも「後紀」にも「歌」をめぐる公的な行事がほとんど記されないこと——「曲水の宴」は記される——と表裏している。正史は、和歌を記録せず、詩賦を記録したのである。

『万葉集』の再現前化を伴う『古今和歌集』の成立は、支配階層における和歌の位置づけを根本から変える出来事だったのだ。そしてこの動きは一過性のもものではなかった。

その証拠に、『古今集』より約五十年下る時期に成った『源順集』の詞書に「天曆五年官旨有りて初めて大和歌えらぶ所を

梨壺におかせ給ひて古萬葉集よみときえらばしめ給ふなり。」とある。和歌を貴族文化の根底に据えるという新たな文化政策が『万葉集』を正典とし、それ「訓」を与えることを促したのである。

しかし、それは、大久保正氏によれば、「萬葉集の文字を追つて忠実にこれを読み解いたのではなく、上田英夫博士が述べてゐるやうに、むしろ萬葉時代からの古歌の伝誦に相当通じて居り、これに助けられておぼろげながら或る程度まで萬葉集を読み得たのであらう。かうした古歌の伝誦が一種の訓点の役割を果たしてゐたと云ふのが当時の実情に近かつたのではなかつたらうか。古点もしくはその前後と考へられる萬葉集の歌の古訓に、原文の文字から離れた訓の施されてゐることが尠くないといふ事實は、かうした実情を反映するものと見てよいであらう。」というレベルのものであった。つまり、原文を原文のまま読むのではなかつた。十世紀の人々は彼らの文字言語の体系のなかで『万葉集』を読んだにすぎず、その限りにおいて別堤訓方式のテキストを創りはじめたのだった。

## 6. 原文テキストにおける差異の戯れ

やはり『万葉集』が「読み得る」ものとなるには、幾世代にもわたる試行錯誤を経て、鎌倉時代の仙覚を待たねばならなかつた。

ともかくも仙覚は『万葉集』二十巻すべてに訓を与えた。同時に、独自の注釈を作成した。その意味で、『万葉集』を「集蔵体」として観た最初の人だった。

『万葉集』の一首一首が読めるものとなる唯一の方法、それは、『万葉集』全体から出発して一首一首の漢字文字列の読みを勘案することに他ならない。仙覚、契沖、澤瀉久孝、……すぐれた訓詁学者は皆この方法を繰り返している。それは単なる偶然ではなく、『万葉集』がそのように出来ているからである。

4節で述べたように『万葉集』の原文の難しさ——その書記が多様で、解消不可能な差異の戯れ(差延)を孕んでいること——が現われるがままになっているのは、『万葉集』が「集蔵体」であることによるのである。

それにしても、万葉歌の書記には、「文句錯乱」と評されても致し方ないような原則性の欠如がまわりついでいる。結びに少し例をあげて論題を具体化しよう。

問答

151 佐保河原鳴成智鳥何師鴨川原乎思努比益河上

152 人社者意保尔毛言目我幾許師努布川原乎標緒勿謹

右二首詠鳥

卷七の「雑歌」部から「問答」という項目でくくられる四首一塊りの歌群の前二首を抜いてみた。訓釈上さしたる議論を呼んだこともなく、さして凝ったとは言えない書きぶりの二首だが、簡単に読ませてはくれない。

まず句の切れ目を探すのも一苦労である。「佐保河原」、「何師鴨」、「川原乎」などは〈名詞+助詞〉というパターンで書かれているから分かりやすそうなのだが、「鳴成智鳥何師鴨川原乎」と続けて眺めてみるとかなり分かりにくい。うっかり「鴨川」などと読んでしまいそうだ。『万葉集』では「鴨」が詠嘆

の助詞を書くために広く用いられていることを知っている必要がある。

「鳴成」が「鳴くなる」(「なる」は伝聞推定)であることを読み解くのも簡単ではない。「成」は「なす」とも訓みうるし、「なる」の場合も多く beome の意を書くために使われる。伝聞推定の「なり」は「奈利」「奈里」など音仮名で書かれる事が多い。しかし、「成」で書かれる例も十六例あるのである(二六八、一七五六など)。そういう例を見つつ、また断定の「なり」が「成」で書かれるのはわずか三例であることも見つつ、判断されることになる。

句切れができてもおお、「益河上」を「いやかはのぼる」と訓むこと、「幾許」を「ここだ」と訓むこと、「標緒勿謹」を「しめゆふなゆめ」と訓むことなどすべて『万葉集』全体を見渡さないと決まらないのである。

さらに、「益」を「いや」と訓んで「いやかはのぼる」という訓が定まるためには上の詰問の表現「何しかも」と呼応する形で「いやかはのぼる」が成り立つことが確証されないとけない。「いやかはのぼる」は映像になりにくい表現だ。そこで『万葉集』内二十例ある「ちどり」がどう読まれているかを検討すると大伴家持の

416 夜具多知尔寐覺而居者河瀬尋情毛之努尔鳴知等理質毛  
(夜ぐたちち寝覚めて居れば河瀬とめ情もしのに鳴くちどりか  
も)

という歌の中に詠まれている「河瀬尋(かはせとめ)」という表現が当該歌の「川原をしのひいや河上る」に通じることが分

かる。千鳥は（餌を求めて）瀬から瀬へと移っていくのだ。だから、ここは「どうしてこんな河原がよくってどんどんと遡って行くのか」と千鳥を問い詰める表現だと分かる。

この歌に関して渡瀬昌忠氏『万葉集全注 巻第七』は、「歌い手は、（中略）どうして、千鳥たちは、たいしたこともないこんな川原を賞美して次から次へと上ってくるのかなあ、と問いかけています。そのように詰問し詠歎するかたちで、千鳥の声に対する感動を表現しようとする歌」と注している。

しかし、「どうして、千鳥たちは、（・・・）次から次へと上ってくるのかなあ」という説では第三者的に眺める視点となってしまう、作者と千鳥のあいだの二人称的な「問答」にならない。この「問答」では、人が千鳥を問い詰めるからこそ滑稽さが産みだされるのだ。

これに対しての「答」は、「人こそはおほにも言はめ我がここのふ川原を標結ふなゆめ」（人こそは見どころもないと言うでしょうが、私にとってはこんなにも素晴らしい川原ですよ、標など結わなくさいな、決して。）となっている。「我がここのふ」から、これが千鳥自身の「答」だと分かる。左注に「右一首詠鳥」とある通りで、千鳥を問い詰めると千鳥が「我」で答えるという構成になっている。

渡瀬氏『全注七』は「もともとは、歌垣や宴会での戯れのやりとりであろう」と推測する。しかし、その理解では、書き手がこちらにいて、向こう側で展開している「やりとり」を写していることになる。それでは人間と千鳥の「やりとり」を人間が演じていることになり、舞台設定としては少し込み入った状

況になる。

この「問答」は、むしろ、想像の中で夜の川原を遡っていく千鳥に問いかけ、想像の中で千鳥が人に答えるという了解でいく方が映像として面白いと思う。たとえ想像の中の絵であっても千鳥自身が答えるという設定の方がどれほど生き生きとした面白さをもつことか。「人こそは」の駄洒落的效果も、千鳥が言うからこそ効いてくるというものだ。

しかし、歌垣や宴席という「場」で説明するという方法を持ちだしてこの歌を説明しはじめるやいなや、原文のもっている生彩は消え失せ、イメージが希薄になるように思える。

こうした例に限らず、文字表現一字一字にこだわって逐語的に読んでいくことでむしろ歌言葉の対話的な性格が浮かび上がり、状況が想像されるケースは少なくない。

さらに言えば、巻七という歌巻は、『万葉集』全体の中で言えば、類聚の歌巻に属する。この巻を「作者不明歌巻」と呼ぶ人もいるが、それは恐らく間違った判断であろう。巻七は個々の作品を作者から切断して分類し、類聚しているからだ。つまり、コンテキストから切断された歌々なのである。そういう性格の作品にもとの「場」を想定すること自体、やはり方法的に誤っているのである。

短い原稿ゆえ実例の分析がほんの一つで終わるが、この「問答」の解釈がやはり『万葉集』全二十巻の中の巻七であることよって可能になるのだということは示せたのではないかと思う。

（了）



(注1) 私は別の原稿で「今日『万葉集』を読むとはどういうことであるのか。そのことを通じて私どもは何を行おうとしており、また実際には何を成し遂げているのであろうか。」という問いを立てるところから出発して『万葉集』に内在する読解不可能性の構造について論じている(「テキストとしての『万葉集』」、『アナホリツシユ国文学』創刊一号、二〇一二年二月、響文社刊)。

- (2) 「『万葉集』をいかに読むか」、「『万葉集』を読む方法」、「『万葉集』研究の現在」といった言葉は八〇年代から九〇年代にかけて商業的プロバガンダの機能を果たしてきたし、専門家もそれに乗った。二〇〇〇年代、もはやその市場そのものが消失した。当時様々な意匠をもって登場した方法論談義はもはや消費されつくした。本当の問題はそれらが『万葉集』テキストの読解の歴史そのものを隠したことにある。
- (3) ヤコブソンの分析例は自説の主張のために作品を利用してはいるにすぎない。理論自体が作品にとって超越的なものである。私もかつて卒論でその詩学を応用した対句論を書き見事に瓦解した。
- (4) O・デュクロ/T・トドロフ著、滝田文彦他訳『言語理論小事典』(朝日出版社、一九七五年)、二七五ページ参照。
- (5) 聖アウグスティヌスは能記・所記の記号論の図式を最初に提起した人であり、アントワーンヌ・アルノーとクロード・ランスコの『一般・理性文法』附「話術の諸基礎」(いわゆる「ポール・ロワイヤル文法」)はこの図式を継承している。
- (6) 「グラマトロジーについて」第二章「ミニユイ出版、一九六七年)でデリダは、ソシユール『一般言語学講義』

の記号概念がなお超越的な意味という形而上学的モメントを維持していると指摘している。

- (7) 『哲学の余白』(ミニユイ出版、一九七二年)におけるデリダはソシユールの「差異」の概念を「差異の戯れ *le jeu de la différence*」すなわち「差延 *la différance*」のテーマとして扱っている。
- (8) 「万葉集はよめるか」、「美夫君志」七号、一九六四年。
- (9) 旅人や憶良の仮名書きは、漢文と倭歌を組み合わせて作る作品の一部として書かれていることに注意すべきだろう。
- (10) 漢字の書き取り能力と思考力が相關すると考える教員は多いと思われる。
- (11) 私は東洋言語文化学院(INALCO、パリ大学の一機構)で一、二年生に日本語を教えた時、「漢字は書くのに時間がかかるが、読む時には早い」と説明していたが、それは同学院の教員間でのコンセンサスであった。
- (12) 効率性を重んじる人々が「戯書」などを発明するはずがない。
- (13) 稲岡耕二氏、『万葉集全注 卷第十二』、六四―六五ページ。
- (14) 「特有言語」は *idiome* の訳。個人独特の語法をさすが、詩や哲学においては積極的な意味をもつ。
- (15) 澤瀉久孝、「戯書について」、「国語國文の研究」二二集、一九二八年。
- (16) 「集蔵体」の概念については、以下参照。西澤一光、「人麻呂歌集における『辞』の文字化をめぐる」、『論集上代文学 第三十三冊』、二〇一二年、笠間書院。同、「書物の

- 構築と文化的自立の問題——集蔵体としての『万葉集』をめぐって——」、古代文学会二〇二二年夏期セミナー発表レジュメ。同、「テキストとしての『万葉集』」、「アナホリツシュ国文学」創刊一号、二〇二二年二月、響文社刊。
- (17) 「仮名序」に「これよりさきのうたをあつめてなん、まねえふしふとなづけられたりける。」とあり、「真名序」に「昔平城天子詔侍臣、令撰萬葉集」とある。
- (18) 前掲折口説を承けつつ大久保正「古代萬葉集研究史稿（その二）…古点以前の萬葉研究」（北海道大學文學部紀要一〇、一九六一年）の言うところによる。
- (19) 小町谷照彦訳注、『古今和歌集』、旺文社、一九八八年。
- (20) 奥村恒哉氏「拾遺集の萬葉歌」（万葉第十四号、一九五五年）によれば「萬葉集が當時勅撰集として扱はれてゐた事は事實である」。したがって、その当時、大伴家持の編纂という問題は隠蔽されざるを得ないわけである。
- (21) 『万葉集』が古今序注言説のなかでキャノン・フォーメーションに関わってきたことについては拙論「古今集序注と十二世紀の言説空間——書物・歌学・王権をめぐって——」（青山学院女子短期大学紀要）第五十輯、一九九六年）に述べた。
- (22) 武田祐吉、「萬葉集の古点」、國學院雜誌五十三ノ二、一九五二年六月。
- (23) 大久保先掲、一七七七ページ。